

はしがき―本書の成立の経緯について

いまこれを書いている私の部屋に、山口瞳氏のパネル写真が飾られている。

書齋の籐椅子に座り談笑しているところを撮ったものである。黒い毛糸の室内帽を被り、黒つぼい毛糸のセーターを着ているから季節は秋か冬であろう。手にされている二枚の名刺は、談笑している相手とこれを撮ったカメラマンのものであろうか。とすると初対面の人物と話されているのだろうが、どこにも警戒の色はなく、柔和でごく自然の笑顔を見せている。その笑顔を見ているとつられてこちらも笑みを浮かべてしまいそうな、気持ちを和ませるような笑顔である。

山口瞳氏の写真は今まで数多く見たが、こういう表情のものは意外と少ない。真面目な顔つきものも多く、スナップ写真でも他の人が笑顔を見せているなかで、一人、口もとをひきしめて写っている。どことなく硬い表情が多い。

初めてこの写真を見たとき、あつ、こんな笑顔もされるのだな、と軽い驚きを覚えた。そして、こ

れが日常の表情なのだろうと思つた。

このパネル写真は治子夫人から戴いた。何回目かの訪問中、半地下の食事室でお話を伺っていると、朝日新聞社の方がこのパネルを返却に来られた。玄関から戻つてこられた治子夫人の手にパネルがあり、それを見せていただいたのだが、そのとき私は物欲しそうな表情をしたのであろう。治子夫人は、写真は他にも沢山あるから、と言つて下さつたのである。私は恐縮しながらも嬉々として頂戴した。

それ以来このパネル写真は私の部屋に飾られている。机から顔を上げると山口瞳氏の笑顔が目に入るところにある。この笑顔に見守られながら、私は「作家山口瞳・以前」を書いた。考え倦んだり、書き倦んだときに、この山口瞳氏の笑顔に励まされてきた。

吉行淳之介『軽薄のすすめ』（角川文庫）の解説を山口瞳氏が書いた。そのなかに、「吉行さんのものを読むと、私は勇気づけられる」とあり、「よい書物は読者を勇気づける」と書かれている。それを読んだとき、私にとつて山口瞳氏はそうした作家だと思つた。

確かに私は長い間、山口瞳氏の作品を読むことで、勇気づけられ、元気をとり戻してきた。昨年私は勤務先の会社から永年勤続表彰を受けた。会社生活は平坦なものではなく、途中何度も辞めようかと考えたことがある。気持ちが沈んでいるとき、鬱屈するものがあるとき、何もかも放擲ほうてきしたくなつたとき、きまつて山口瞳氏の作品を読みたくなつた。寝床のなかで何篇か読むうちに、気持ちが伸び

やかになっていくのが分かった。そして、もう少し頑張ってみようかと思ひ直し、眠りに入ることが何度もあった。山口瞳氏は私にとってそうした作家であった。

一番最初に読んだ山口瞳氏の作品がなんであったのかは覚えていない。『人殺し』であったか『旦那の意見』か『男性自身』の一冊か、記憶は曖昧である。すぐ熱心なファンになったのではない。むしろ、最初のころは反発の方が強かったように思う。偏見と独断に充ちた（と当時は思った）断言癖、定義づけの好きなどころ、作中にでてくる奇妙なアダナの人物たち、といったものがトータルとなつて強固な山口ワールドを作りあげていた。一作や二作を読んだぐらいでは、なかなかその王国へ入りこめなかつたのではないか。

ふつうならそこで読むのはやめるのだが、なぜか読み続けた。吸引力があつたときか言いようがない。『世相講談』を読んで驚倒し、『江分利満氏の優雅な生活』で完全に山口ワールドの住人となつてしまった。作品を遡さかのぼることでようやく山口瞳氏の全体が見えてきた。そうなるまで感じていた抵抗感はなくなつた。

『男性自身』シリーズは毎年一冊ずつ刊行され、発売を心待ちするようになった。一年が過ぎても刊行されない年はジリジリとした思ひを少しでも宥なだめるために、旧作の読み直しをしたりした。

私は学生のころから初版本収集マニアで、初版本以外は一切買わないという悪癖があつた。初期のころの『男性自身』シリーズを古本屋で探しまわつたが見つけられず、といつて読みたい欲求を抑えきれずにこのときばかりは、禁を破り版を重ねた本を買つたものである。

そうまでして山口瞳氏の作品を読みたいと思っていたが、週刊新潮や小説雑誌を定期購読する気にはならなかった。山口瞳氏の作品は一冊の本になってから読むべきであるという強い思いこみがあった。そのため、喫茶店や病院の待合室で週刊新潮を手にしても、『男性自身』はその存在だけを確認して頑に読まない時期があった。連載中の作品一篇だけ読むことは、作者に対する冒瀆ではないかという思いが強かった。

山口瞳氏にお会いしてみたいという気持ちは多少あったが、会うことが怖いという気持ちの方が強かった。氏の気難しき、人の好悪の激しさをいろいろな人が言っているが、それは本質的なところでの優しきの裏返しであると考えていたから、それが怖かったわけではない。私のなかにある甘え、弱さ、だらしなさといった負の部分を、よく見える目で見透かされてしまう怖さといったものだろうか。それでも東京へ行ったときに、時間の余裕があると国立へは何度か足を運んだ。氏の書かれる「日本一美しい」銀杏並樹の大学通りを見たいと思った。氏の「行きつけの店」を歴訪したりもした。なによりも変奇館がいかなるものか実見してみたかった。そして氏が限りなく愛した雑木林の庭も是非見てみたいといったミーハー的な好奇心も強く、散々探しまわったが、結局見つけだせなかった。

一九九五年八月三十日の突然の訃報は大きな衝撃であった。そのころは仕事の関係で飛行機に乗る機会が多く、機中で週刊新潮の『男性自身』を読んでいた（そのときはもうすでに拘りはなくなっていた）。その年の人間ドックで異常を指摘され、慶応病院で「検査の鉄人」を自称している回は読ん

でいたし、病名が従隔内淋巴腫瘍であることも知っていた。不吉な予感はそのもの、それほど症状が深刻なものであるとは『男性自身』を読む限りわからなかった。六月末には恒例になった上山温泉へも行かれていたし、七月の直木賞選考委員会へも杖をつきながらではあるが、出席されているのをテレビのニュースで見ている。年齢を考えると、近い将来この連載も終わることを覚悟しておかなければいけないが、まだまだ先の話と高を括っていたのだ。訃報は不意打ちのように私を打ちのめした。山口瞳氏が亡くなって一ヶ月で『江分利満氏の優雅なサヨナラ』が刊行された。亡くなるギリギリまでお書きになった『男性自身』が、これほど早く読めるとは予想していなかったもので、とても嬉しさと感じる一方で、これが最後の本なのだと複雑な思いを味わった。

読み始めて、あつと思つた。これはいけない、まるでご自分の死を予感している文章ではないか。「大海死せり」「おとうと」「迷信」「捨て台詞」にはいずれも深い哀しみの思いが底に流れている。死を前にして脳裏によぎる思いをそのまま書き綴ったかのような美しく澄んだ文章のように感じた。

これらのエッセイは七年に亘つて書かれた日録体をひとまず終え、旧来のエッセイに戻してすぐに書かれたものである。日常のあれこれが中心の記述から離れ、氏のなかに深く沈殿している思いを、それまでも一度は文章で表現した内容であるが、改めて過不足なく表出したいという思いがあったのであろうか。

私は山口瞳氏が本能的に自らの死を知覚していたのではないか、という思いを否定できないまま読み終えた。むろん、山口瞳氏の死を一ヶ月前に経験していることの影響はあるにせよ、痛切な思いで

読み終えたのは事実である。

これがほんとうに最後なんだな、と思うと新たな悲しみが身内を襲ってきた。

そして山口瞳氏の訃報の衝撃は、実は山口瞳氏の死そのものではなく、これ以上、新たな作品を読むことのできない自分に対してのものではないか、と考え惘然^{ぼうぜん}としてしまった。

人間山口瞳氏にお会いすることがなかった私にとって、山口瞳氏とは書かれた作品が全てであり、それ以上でもそれ以下でもない。そうであるなら、そうした思いもやむを得ないことではないか。山口瞳氏の死がもたらした感情の揺らめきは、つまるところ自己愛の謂^いではないか、という不遜な結論を導いてしまった。

山口瞳氏の作品をもう読むことができないという思いは、私を落胆させ不安な気持ちにさせた。氏の作品は全部読んだと思っていたが、未知の作品集や単行本未収録の作品もあるのではないか、それを調べてみようと思いついた。

だが山口瞳氏の業績を辿る作業は困難であることはすぐ判明した。氏には詳細な年譜がないのだ。個人全集である『山口瞳大全』にも付いていない。新潮現代文学、小学館昭和文学全集に付載されている二つの年譜が公式のものではないか。しかし、この年譜も簡略なもので、私が持っている本が記載されていないこともあり、信頼性は低いと思わざるを得なかった。

山口瞳氏の年譜が簡略なものしかないことは、氏自身が理由を書いている。書いた時期から考えて、「新潮現代文学」に収録される年譜にたいして書いたものだろう。『男性自身』八二五回でこう言っ

いる。年譜を作製するのがイヤでイヤでたまらない。自分だけナシにできないか。イヤな理由は、年譜の第一行である出生の日付をどうするかでまず迷ってしまう。次に学校のことがある。中退を繰り返しているから、それをひとつひとつ書き記すことが面倒でたまらない、と厭な理由を並べ、続けてこう書いている。

以上、ゴタゴタと書いてきたが、私が、年譜を作製するのが厭で厭でたまらないということの本当の理由は、これではない。芯なるものは別にある。出生のことなどは、ごまかしてしまえばいい。

年譜の概略というか下書きにあたるものは、全集の編集部で作ってくれた。私はそれに目を通し、訂正すべき箇所を直せばいいのである。

私は、それをザツと見ていったときに、果たして、思った通り、いやあーな思いがこみあげてきた。ウツとなった。

なんとという愚かな、なんとという拙い仕事を続けてきたことか。なんとという脆弱な仕事で、今日まで飯を喰ってきたことか。出生年月日などは、罪の意識なしに偽ることができるが、こつちのほうは、ごまかすことができないのである。

発表当時は、まあまあ悪くないだろうぐらいに思っていたものも、いまとなつてみると、こつちの胸を痛めつけるのである。

こんなことを書くとは叱られるに違いないのであるが、私は、作家とか文章家という職業は賤業だと思っている。すくなくとも、私が私のことをそう考えているということは間違いない。賤業であり危険人物である。小説家が出るということは、親類の者にとっては迷惑きわまりないことだろう。

大衆小説を長く書いていると、書きたくないものを書かされたり、発表したくないものを発表するということにもなってくる。そういうアヤフヤなことでもって、ゴマカシでもって長く生活しているということが、私を痛めつける。こんなことは言い訳にもならないが、自分の年譜を見ていると否応なしに、そのことを思い知らされる。

年譜の作製は、自分で自分に鉄槌を下すという作業である。

（「年譜」『卑怯者の弁』所収）

そのときはこのエッセイの存在を全く失念していて、なぜ山口瞳氏ほどの作家のことがこれほど分らないのか、詳細な年譜がないのは、正当に評価されていないからではないか、という愛読者特有の怒りを覚えていた。そして誰もやってくれないのなら自分がやろう、山口瞳氏の作品に恩義を受けたものとして、氏の三回忌の仏前に捧げようと決心した。山口瞳氏が亡くなって三ヶ月が経っていた。詳細な年譜は作家研究の基礎資料である。全てはここから始まるのだと考えていた。今後研究者によつて書かれるであろう「山口瞳論」のために稚拙なものであれ、その労が少しでも軽減されればよい。

いという思いであった。

そう考えてスタートした年譜作製だが、すぐ壁にぶつかった。言うまでもなく年譜とは事実の積み重ねである。客観的事実でなければ意味をなさないのは当然のことである。だがそれを調べ、ひとつひとつ実証していくことは膨大な時間とエネルギーが必要であることがすぐ分かった。まして札幌（そのころは大阪にいた）と東京との地理的な問題がある。勤めを持ちながらの日曜年譜製作者では、とても完成は期し難いと断念せざるを得なかった。

次善手として考えたのが、全作品年表、書誌を編むことである。これなら地方にいても図書館に通い詰めると、一定の成果をあげることが可能であると思つた。

全作品を探索する作業は予想以上に苦しいものだった。開館と同時に図書館に入り、雑誌のバックナンバーを借りだし、閉館までひたすら目次を目を皿にして見ていく。未知の作品を発見すると疲れも一瞬吹き飛ぶが、一日やり続けて収穫ゼロということもあり、そんな日はオレはなにをしているのだろうと気が滅入った。雑誌の種類は無尽蔵のようだし、全てが大阪、札幌の図書館に所蔵されているわけではない。あつても欠号だらけという雑誌も多かった。

一年が過ぎても成果は寥々たるものであつた。単行本になつている作品の初出が不明なものも数多く残つていて気持ちが悪えていた。参考のためと思ひ、浦西和彦編『開高健書誌』を覗いてみて愕然とした。「書誌」とはここまで調べなければならぬのか、これほど精緻なものでなければ「書誌」

と称べないのか、到底無理だと匙を投げかけていた。それに加えて前掲の『男性自身』の「年譜」の存在もこたえた。山口瞳氏の意に反することをしているのではないか、氏が存命なら許してもらえないことをオレはしているのではないかと思うと辛い気持ちになった。

もうやめよう、とても素人の手に負えるものではない。そう思い、一カ月程作業を投げだしたこともある。だが単行本未収録の作品コピーを読みなおしをしているうちに、完璧な書誌を最初から目論むことはない、ないよりあった方が多少でもプラスではないか、そして山口瞳氏のフアンの内には、私と同じようにどんなものでも読みたいと考える人もいるのではないかと思いきや、作業を再開した。長篇小説「結婚します」の初出がどうしても分からず、逡巡しながらも思いきって沼田陽一氏に照会の手紙を書いた。氏が集英社文庫『谷間の花』の解説を書かれ、そのなかに「結婚します」は地方紙に連載された作品であることをお書きになつていたのである。

沼田陽一氏は鎌倉アカデミアで山口瞳氏の同級生である。『尖塔』の同人ではなかったが尖塔懇話会の会員として、『尖塔』創刊号の山口瞳氏の創作「愛別離」の読後感を二号に書いた、古くからの山口瞳氏の良き理解者である。

そのときはそんなことも知らず、「地方紙」の具体的な新聞名を覚えていたかといふと書いた。

氏からはすぐ返事が届けられ、古いことでもあり記憶が曖昧なので、治子夫人に電話で確認したところ、共同通信社配信で地方紙数紙に連載されたものであること、うち一紙は河北新報だったと思う、とのことであった。

私は長い間の胸のつかえがとれた嬉しさですぐお二人に礼状を書いた。治子夫人には初出不明作品名を書き連ね、御教示をお願いした。

治子夫人から叮嚀なお返事を戴いた。そこには、膝の皿を割り七十日間入院して退院したばかりであること、今も杖をつけて歩いている状態で、スクラップブックは書棚の高い所にあり、今は見ることができないとあった。そして、手近にあったスクラップブックの一部を切りとって、記念にと別封筒に入れて送って下さった。

また、手紙には山口瞳氏について、氏はご自分が書かれた雑誌や本などが送られてきても見るのもイヤという性分であること、自著も遊びに来た人へ上げてしまわれたりでないものもある、とも書かれてあり、山口瞳氏の一面を知ることができた。

それ以降、夫人には年譜的事項に関する質問攻めの手紙を書き続け、夫人は不躰な問いにも親切にお答えをしてくれた。どこまでも寛大であった。そして記憶力も秀れた方である。夫人から戴いた手紙がきは、一年で四十通を超えているから、いかに私が夫人に甘え続けたか分かるうというものである。

一度だけ夫人から、瞳さんのことを考えてまた新たな悲しみに襲われた、と書かれた手紙を受けとった。夫人の気持ち^{そんたく}を忖度せず、作品外の山口瞳氏のあれこれを聞き続ける私への軽い抗議だったかもしれない。山口瞳氏が亡くなられてまだ一年余りしか経っていないのだから当然の話である。私は非礼を詫げる文章を書きながら、すぐそのあとに質問事項を書き加える体たらくであった。

山口瞳氏は田舎者を嫌った。憎悪されたといっている。もちろん、この田舎者は地方在住者の意味でなく、「遠慮しいしい凶々しい」性根の者を指しているのだが、私はまさしくその一人だった。夫人はそんな私にも寛容であり続けてくれた。

夫人が作られたスクラップブックを拝見させてほしい、とお願ひしたのは、こうした手紙のやりとりを、三、四回したところだった。それも許され、最初の変奇館訪問は一九九七年七月の異常に暑い日だった。

タクシーから降りた途端、治子夫人が玄関のドアを開け迎えて下さった。ドアの横の表札は、中川一政からの手紙の宛名を凸状に起こしたものである。山口瞳氏は中川一政の書がお好きだった。

応接間は写真で見たままであつたが私は興味津々であつた。壁のいたるところに絵や書が飾られている。「たにし亭ありき」に書かれた、三岸節子の絵、『小説新潮』のグラビア頁「ウチのタカラモノ」で紹介されたマルチェット・ポッカッチの大蒜の絵、吉行淳之介の「樹に千びきの毛蟲」の色紙が表装されている。そしてご自身の「自画像」、『山口瞳大全』の口絵に使われた焦茶色の瓶の絵等々。治子夫人への挨拶も上の空で、視線をあちこちに向ける私を、夫人は不作法な男と思われたらうと今になつて恥じ入ってしまう。私は感無量だった。緊張感もあり、失語症のように言葉を詰まらせる私に、夫人は優しい笑顔で固まつてしまつている気持ちとを和らげて下さった。

クーラーの風が嫌いという山口瞳氏の応接間は暑く自分でも戸惑うほど汗が滴り落ちてくる。持っていた二枚のハンカチはすぐにぐっしょりと重くなつてしまった。夫人は見かねてタオルを貸して下

さった。

夫人は山口瞳氏のことを「瞳さん」とお呼びになられる。そのことが新鮮で爽やかな印象として残った。いろいろなことをお話してくれた。

「正介が見せるように、と置いていったのだけれど」と夫人が渡してくれたのは、「俺は十九歳」のコピーであった。コーセー化粧品品の顧客向け冊子『カトレア』に連載された小説である。全く存在を知らなかった作品で驚いた。パラパラと読むと、山口瞳氏の文体とは思えない作品であった。これはすごい、と思った。この作品の存在を治子夫人も正介氏もご存じなく、東北の山口瞳ファンの方から手紙で知り、コーセーに頼みコピーを送ってもらったものとのことであった。

スクラップは応接間の書棚の前に、正介氏が用意して置いてくれた。膨大な量である。

「知っているものばかりだと思いますよ」と夫人は言うが、No.1のページを開いたときから、未知のものばかりである。

私は大量の汗を流しながら、ノートに書き写していった。新聞、女性週刊誌に発表されたものは今まで、ほとんどノーチェックだった。ひとつひとつ読んでいくので時間がかかる。作業は捗らなかった。

夫人が何度目かの冷たいウーロン茶を持ってきて下さったときに、「少し休憩されたら」とおっしゃり椅子に座られた。前夜、私は夫人への質問事項を用意しており、漸くそれをお質ねする気持ちの余裕ができた。鎌倉アカデミア時代の同人誌『尖塔』に、山口瞳氏が書かれた作品のことを教えてい

た'dきたいと思っていた。

夫人は隣の書齋から文庫のようなものを持ってこられた。その中から『尖塔』二冊がとり出されたとき、私はビックリしてしまった。まさか現物があるとは全く考えていなかった。五十年以上経っているとは思えないほど保存状態は良かった。表紙のカラーの絵も鮮明である。本文は孔版で字が掠れ読めないページもあるが、昭和二十一年の学生の同人誌とは思えない立派なものであった。

他にもその文庫には、国学院大学の卒業論文「森鷗外——『鷗外的』性格の成立——」、「履歴」の原稿が保存されていた。私は信じられない思いで興奮しながらそれらを見せていただいた。

「履歴」の原稿を見たとき、すぐにはピンと来ず、「江分利満氏の優雅な生活」の下書き原稿だろうか、と思った。夫人も二、三枚に目を通され、「そうね、『血族』の下書きかもしれないわね」とおっしゃった。この「履歴」が『現代評論』創刊号のために書かれた幻の作品である「履歴」と気がついたのは、その夜ホテルに戻ってからである。

貴重な資料の保存については、治子夫人の功績だろう。山口瞳氏のご自分の作品についての扱いは夫人もおっしゃったように冷淡だった。『男性自身』のなかにも、作品元帳をつけてなく、編集者からせめてそれくらいは記録するように言われたと書かれている。

そのあとも引きつづきスクラップの点検をさせていただいた。「食事にしましょう」と夫人の声で、驚いて時計を見ると六時をまわっていた。初めての訪問で食事まで、とためらったがすでに準備が整っていた。

半地下の食事室に招じられた。「瞳さんはいつもこの席だったの。ここに座って」と山口瞳氏の席に座らせていただいた。正面の窓から「雑木林」の庭を見ることができ、薄暮のなかに背の高いナラの木がまっすぐ伸びている。山口瞳氏もこの同じ風景を見ながら食事をされたのだな。窓に接するように水槽があり、鯉が泳いでいる。水槽の向こうに石垣がある。苔を根付けさせるために、ところどころに切り込みの溝をつくり、そこから水が流れるように苦労された、『男性自身』にも書かれた石垣である。いまは水が流れていない。夫人が笑いながら、「あまり水道代がかかるのですぐにやめたのよ」とおっしゃる。それを聞いて私も笑った。山口瞳氏の残念そうな口惜しそうな顔を想像し、笑いはなかなかおさまらなかつた。同時に唐突に深い悲しみがきた。その山口瞳氏がいらない。この世から姿を消してしまった。涙が溢れてとまらない。私はうろたえ、顔の汗を拭うようにタオルを顔に押しあてた。悲しみはしばらく続いた。

オレは山口瞳が亡くなったとき、山口瞳の死そのものではなく、死によって作品を読むことができないう自分が悲しいのだと思った。他者の死はそうしたエゴイステックな悲しみではないかと傲慢にも考えた。だが、いま感じているこの悲しみは違う。オレは心から山口瞳の死を悲しんでいる、そう思いながら顔を拭っていた。

食事のあと「オレは十九歳」のコピーをとらせてもらい、夫人に見送られ、辞去したのは八時をまわっていた。スクラップは昭和四十二年までしか終えることができなかつた。駅前のロージナ茶房に寄り、コーヒーを飲んだ。どっと疲れがでた。治子夫人も同様だろうと考え、申し訳なきと感謝の

念で一杯だった。

スクラップの他に『尖塔』、「卒業論文」、「オレは十九歳」、「履歴」など収獲はとても大きく、一本にまとめる価値のある書誌ができると思ひ嬉しかつた。その一方で全作品リストが穴だらけであることが分かり、あらためてやり直すしかないと思つた。三回忌までに完成させるといふ計画は修正していたものの、まだ年内にはという甘い考えもあつたが、大幅に予定を変更せざるを得なかつた。

一カ月後、夏休みを利用して、スクラップの続きをお願いした。二日間通つて全部に目を通すことができた。その後も何度か訪問を重ね、手紙で不明点を聞き続けてここまで辿りついた。

これほど治子夫人と正介氏にご協力いただきながら、「書誌」としてまとめあげることができなかつたことは、一に私の責任である。少しでも資料的価値があるとすれば、偏にお二人のお力添えであると深く感謝したい。

「作家山口瞳・以前」は、評伝といつたら実証的に問題が多く、といつて作家論とはとてもいえないレベルである。甚だ中途半端なものであるが、単行本未収録作品を中心に、山口瞳氏周辺の人たちの著作で肉付けしたものである。全著作目録には、存在を知らながら実見できずに記載できなかつたものも多い。その意味で表題は羊頭狗肉のようで忸怩たる思いもあるが、今後の課題として努力を続けていきたい。治子夫人には身に余る跋文を頂戴し、夫人のお名前と一緒に並ぶ喜びだけでも本書刊行の甲斐があつたと思つている。

初出不明のものも多く、大方のご教示をお願いできたらと考へている。